

# 進化するビーズ装飾

## ケニア・サンプル社会における「モラン」の変容

中村香子

ケニア北部に住む牧畜民サンプルは、ビーズを用いた「伝統的」な身体装飾を行うことでマサイと並んでよく知られている。とくに、赤い染料で頭髪を固めてビーズで全身を飾り立てている「モラン（戦士）」は、エキゾチックなものに魅了される多くの外国人観光客を惹きつける存在である。本稿では、サンプルの「モラン」が身につけているビーズ装飾の変容に目を向けながら、彼らの現代的な横顔を紹介する。

### 1 サンプルの年齢体系

東アフリカの牧畜社会の多くには、年齢体系とよばれるシステムがある。このシステムは主として年齢にもとづいて男性をいくつかのカテゴリーに分け、それぞれに特有の社会的な役割を担わせるものだ。サンプルの年齢体系で男性は、割礼と結婚によって「少年」「モラン」「長老」という三つの階梯に分けられている。「少年」とは15～20歳前後に割礼を受けるまでを指し、「モラン」は割礼から結婚するまでの青年を、そして「長老」とは既婚男性を指す。

少年は割礼を受けてモランになると同時に、新

しくつくられた年齢組に加入する。モランは全員がひとつの年齢組に属しており、現在のモランの年齢組（モーリ年齢組）は、1990年に一斉に割礼を受けたものたちが組織した。青年たちがモランとして過ごす期間は約12年で、この期間が終わりに近づくとモランの結婚を開始する儀礼が行われる。この儀礼の後の数年間にモランは結婚して、ひとつの年齢組としてのまとまりを維持したまま長老階梯に進む。これと同時に成長してきた少年を一斉に割礼する儀礼が行われ、新しいモランの年齢組が誕生する。現存する長老階梯には、キレコ年齢組（1921年に割礼）、メクリ年齢組（1936年に割礼）、キマニキ年齢組（1948年に割礼）、キチリ年齢組（1960年に割礼）、クロロ年齢組（1976年に割礼）の五つがある。

### 2 「モラン」とは

モランはふたつの独特な規制に拘束されている。そのひとつは結婚規制である。前述のように、モラン期の終わりが近づくと結婚を開始する儀礼が行われるが、この儀礼は個人的に行われるのではなく、長老会議によって実施時期が決定され、サ

ンプル全土でいっせいに行われる。つまりモランは結婚を禁止されており、やむを得ずにこの儀礼前に結婚するものは、ペナルティーとして牛を一頭支払うことが義務づけられている。

もうひとつは食事規制である。モランは女性の見ている前で食事をすることをやめ、また、女性の目にふれた肉を口にすることができなくなる。ミルクとチャイ（ミルクティー）だけは飲めるが、これも自分以外のモランが同席しているとき、つまりモランがふたり以上で居る場合に限られる。彼らは自力で食料を調達し、女性の目につかない森の中や人が住んでいない小屋に集まって食事をとる。

こうした結婚規制と食事規制は、モランを「家」から引き離すように作用する。割礼を受けるまでは牧童として朝から晩まで働き、早寝早起きをしていた少年が、モランになった途端に昼夜を問わずに出歩くようになり、ある日突然に、数人のモランを伴って自分の母の家に帰ってくるといった独特の行動をとるようになるのである。

仲間とともに家に帰ってきたモランは、一杯のチャイを乞うかわりに旅の道中のできごとを歌う。すると、家の中にはわかにか華やぎ熱気を帯びる。家の主である母親は残りわずかの砂糖を惜しみなく使って、モランたちにふるまうためにたっぷりのチャイをいれる。歌声にさそわれて、あちこちから女性や子供たちが集まってきて、小さな家の外にまで人があふれてとてもにぎやかになる。モランは、女性や子供たちにとって、少し近寄りがたい憧れの存在と言えよう。

また、男性の中で華やかなビーズの装飾をするのはモランだけだ。祭りともなればモランは、赤、白、青、黄といった原色の布に身を包み、化粧をして、歌い、飛び、踊る。そんなモランの姿は彼らが見ずから飾るビーズのように、サンプル社

会をあざやかに彩っている。

### 3 ビーズの装身具と地域差

1999年と2000年に私は、サンプルの高地と低地で56人のモランを対象に装身具の調査を行った。高地と低地とに分けたのは、ふたつの地域が生態学的にも社会的にも異なる特徴をもつためである。高地にくらべて気温も高く、乾燥が著しい低地では、人々は牧草地を求めて移動を繰り返し、牧畜に強く依存している。それに対して高地では移動の頻度は低く、一部の地域では農耕も行われている。また、高地では学校教育の普及率も高く、比較的街にも近いことから家畜や畜産物（ミルク、皮）を売って現金を獲得することも容易である。低地ではより「伝統的」な生活が維持される一方、高地では「近代化」が進んでいると言ってもよい。

モランは合計43種類もの装身具を身につけていた。しかしながら高地と低地をくらべると、装飾の傾向が明らかに異なっていた。低地では43種類の装身具のうち、70%以上のモランが身につけていたものが12項目あったのに対して、高地では5項目のみだった。その一方で高地では、低地のモランには見られなかった新しい装身具が高い頻度で用いられていた。こうした装身具（首に巻くりボン状に編んだビーズ、紡錘形ビーズに丸いアルミの小片をいくつもつけた首飾り、頭に刺す大きな羽根の髪飾りなど）は派手で装飾性が強く、現在のモランの時代（モーリ年齢組）になって生み出された新しい装身具であることがわかった。低地のモランの装いが均質であり「制服的」だったのに対して、高地のモランの装身方法は多様であり一部のモランではとくに派手になっていたのである。

モランの装身具の年齢組ごとの変遷

装身具の日本語説明	A	B	C	D	E	F	G
<b>頭・顔</b>							
1額から耳にかけるビーズ		●	●	●	●	●	●
2耳から頸にかける鎖				○	○	○	○
3額に巻くビーズ				●	●	●	●
4額につけるビーズ飾り	○						●
5長髪	?	○	○	○	○	○	○
6布の頭飾り		○	○	○	○	○	○
7鳥の羽根の頭飾り(小)		○	○	○	○	○	○
8鳥の羽根の頭飾り(大)							●
9飛行機型ビーズの頭飾り						●	●
10かんざし	○	○	○	○	○	○	●
11長髪につける木製飾り	○	○	○	○	○	●	●
12プラスチックの頭飾り						●	●
13頭飾り(鶯の羽でつくる)	○	○	○	○	●	●	●
14花・造花の頭飾り						●	●
15髪にさす櫛	○	○	○	○	○	○	○
16赤い染料		○	○	○	○	○	○
17オレンジ色の粉末化粧		○	○	○	○	○	○
<b>首</b>							
18筒状のビーズの首飾り						●	●
19紡錘形ビーズの首飾り			○	●	●	●	●
20紡錘形ビーズと丸いアルミ片						●	●
21リボン状に編んだビーズ						●	●
22カヤツリ草の根の首飾り				●	●	●	●
23レース状のビーズ飾り						●	●
<b>耳</b>							
24プラスチックの耳飾り				○	○	●	●
25針金の耳飾り		○	○	○	○	○	○
26耳たぶの穴に入れる耳飾り	○	○	○	○	○	○	○
<b>手・腕</b>							
27ビーズの腕輪						●	●
28上腕のオレンジ色のビーズ	●	●	●	●	●	●	●
29皮に縫い込んだビーズ飾り			●	●	●	●	●
30腕時計						○	○
31ビーズの腕時計のベルト						●	●
32腕時計型ビーズの腕輪				●	●	●	●
33腕輪(プラスチック)				○	○	○	○
34腕に巻く家畜の尾	?	○	○	○	○	○	○
<b>胸・腰</b>							
35斜めにかけるビーズ	●	●	●	●	●	●	●
36ビーズ胸飾り						●	●
37鎖につけるビーズ飾り				●	●	●	●
38赤い染料		○	○	○	○	○	○
39ビーズのベルト		●	●	●	●	●	●
<b>足</b>							
40靴(皮製, タイヤ製)	○	○	○	○	○	○	○
41コロブスの毛皮の足カバー		○	○	○	○	○	○
42足首にかける鎖		?	?	○	○	○	○
43膝下に巻くベルト		●	●	●	●	●	●

○: 材料にビーズを利用しない, ●: 材料にビーズを利用, ?: 存在が不明

A~G: 年齢組名(割礼年)

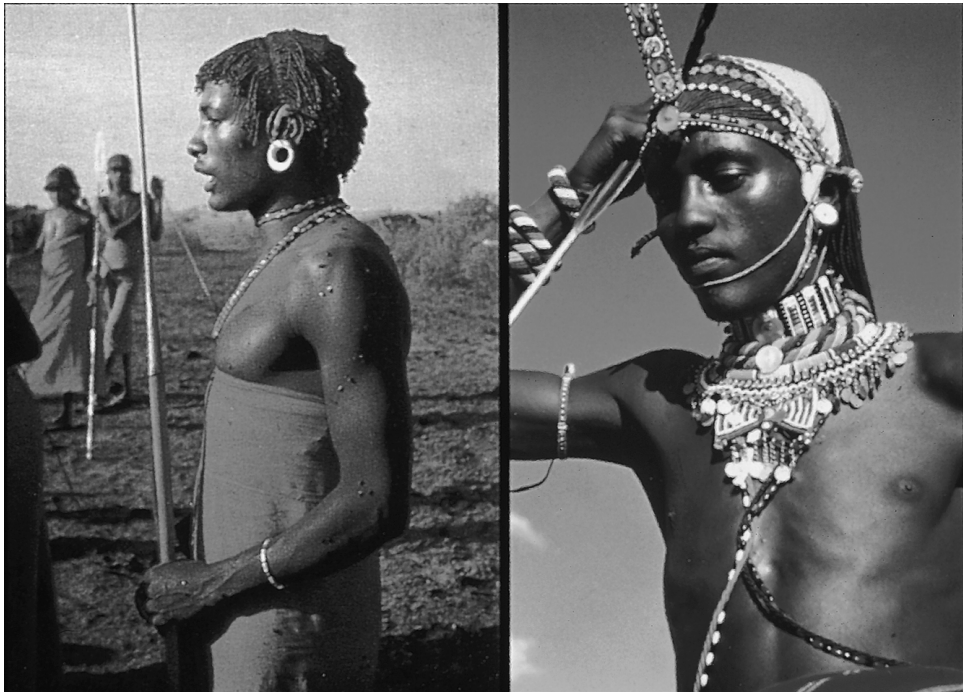
A: メリショ(1912), B: キレコ(1921), C: メクリ(1936), D: キマニキ(1948), E: キチリ(1960), F: クロロ(1976), G: モーリ(1990)

#### 4 進化するビーズの装身具

次に、ひとつひとつの装身具について発生の時期とデザインの変遷を調査してみた。表は、43種類の装身具について、A~Gで示した七つの年齢組がモランだった時代に存在していたかどうかを示している。黒丸「●」は材料にビーズが使われている装身具、白丸「○」は材料にビーズが使われていないものを示している。いくつかの装身具は、もともとはビーズ以外の材料でつくられていたが、のちにはビーズで飾られるようになっていく。モランの装身具は、年齢組をおうごとに種類が増加しており、特にビーズの装身具に注目すれば、1921年に割礼したキレコ年齢組(B)がモランであったときには、わずかに5種類しかなかったが、60年のキチリ年齢組(E)の時代には12種類、現在のモーリ年齢組(G)では27種類に増加している。さらに、現在のモランは同じ種類の装身具をいくつも重ねてつけたり、使うビーズの量を増やして装身具をより大きく派手にし、華やかな装いをするようになっていく。60年頃と現在のモランを比較した写真は、こうした変化を如実に示している。一見したところでは「伝統的」なもののように見えるビーズの装身具が、実は「近代化」とともに急速に進化・増殖するという現象が起きているのである。

#### 5 学校教育と出稼ぎ

モランをとりまく社会環境は、現在大きく変化しようとしている。サンプルの男性458人を対象に行った調査では、学校教育を経験した人は、キマニキ年齢組では65人中3人(5%)、キチリ年齢組では66人中4人(6%)だが、クロロ年齢組で



モランのビーズ装飾の変化（左は1960年頃，右は1999年）

（左の写真は P. Spencer, *The Samburu: A Study of Gerontocracy in a Nomadic Tribe*, University of California Press, Berkeley & Los Angeles, 1965より。右の写真は筆者撮影。）

は132人中30人（23%）、モーリ年齢組では195人中64人（33%）であった。学校教育が装身態度に与える影響は大きい。学校ではビーズの装身具をつけることが禁止されているため、就学中のモランは、普段はシャツやズボンを着ている。彼らは休暇や祭りなど特別の機会にだけ、洋服から腰巻き布に着替えてビーズの装身具をつける。

また、都市へ出稼ぎに行く人も増加している。クロロ年齢組では長老の時代を含めて76%、現在モランであるモーリ年齢組では52%が、都市部で働いた経験をもっている。首都ナイロビでは主に夜警の仕事、海岸の観光地モンバサでは観光客にダンスを見せたり、装身具を売ったりする仕事に就くことが多い。彼らの話を聞いていると、「耳たぶに大きな穴をあけているために他民族に馬鹿にされた」とか、「門番の仕事をしていた家が強盗に

襲われたが、自分が犯人だと疑われて拘置所に入れられた」あるいは「給料をもって街に買い物に行ったら全部すられてしまった」といった出来事が必ず登場する。彼らはまた、故郷では楽しみとして踊っているダンスを人に見せることがおカネになると知ったり、「観光客はビーズをつけて化粧をした自分の写真を撮りたがった」とか、「白人は自分のビーズを法外な値段で買った」といった経験を積み重ねている。

こうしてサンプルの地を離れた人々は、ケニアの他の民族や外国人といった外部社会の人々が彼らに向ける視線を意識し、また、みずから異文化を経験するようになる。おカネがなければ一杯のチャイさえ飲めず、治安が悪くて散歩さえままならない都市生活のなかで、彼らは故郷のすばらしさに初めて気づいただろうし、他民族の生き方を

知ることで、サンプルとして規則を守りながら生きることの不自由さも感じたにちがいない。

## 6 モランの変容

モランの食事規制を学校生活や都市生活の中で守ることは困難である。彼らは「女性の前では食事をしない」を「ビーズをつけた女性の前では食事をしない」と変更したり、肉屋で買う肉や食堂で出される肉を規則の例外とすることで、新しい状況に対応している。

また、結婚規制をやぶって結婚するモランの割合がクロロ年齢組からモーリ年齢組にかけて増加している。キマニキ、キチリ年齢組では約1割の男性が結婚を開始する儀礼の前に結婚したが、クロロ年齢組ではそれが2割になり、モーリ年齢組では、この儀礼が現在まだ行われていないにもかかわらず、すでに4人にひとりが結婚している。

また、これと同時に、「サンプルの街を出るときはビーズを取る」とか、「祭りの日だけビーズを着ける」「キクユの家畜商人と商談するときはズボン履く」、さらには「サンプルでは洋服を着ているが、モンバサに出稼ぎに行くときにはビーズをつける」というようにビーズの装身具をつけたりはずしたりしながら、「モランである自分」や「サンプルである自分」を微妙に演出するという現象も起こり始めている。

かつてのモランは、結婚規制や食事規制を遵守したり、特異な装身具で身を飾って歌や踊りに熱中するといった一連のモランらしい行動を、とくに意識せずに当然のこととして行ってきた。しかしながら、学校教育や出稼ぎなどによって外部の

異質な世界を知るようになった人々は、その経験をとおして逆に自分たちの社会や文化を外側から見る眼をもつようになる。そして、たとえば故郷の風景のなかではモランとしての生活全体と結びついていた歌や踊りが、そこから切り離されて観光地のホテルで擬似的に再現しうるように、「モランであるための要素」がひとつずつ分離し独立して見えるようになってきたのではないと思われる。個々の「要素」が全体性を失えば、そのいくつかを選択して実践したり、逆に実践しないといったことが可能になる。

他者の目につきやすく、かつ、物理的にも着脱可能なビーズの装身具は、あるときは強烈にモランでありたいと願う一方で、別のときはモランであることをやめることも選択しながら、柔軟で多様なモラン期を生きたいと考え始めている現代のモランにとって、格好の道具になりつつある。

そして、モランのビーズ装飾が近代化とともに派手になるという現象は、彼らが他者の視線をとおしてビーズ装飾を「サンプルらしさ」「モランらしさ」として再評価し、強く選び取った結果とみることができる。より華美なビーズを装うことで彼らは、外部社会に対しては「サンプルであること」を顕示する。そしてまたサンプル社会の内部では、就学中であることや、結婚を開始する儀礼の前に結婚して「長老化」したことなどを理由にビーズをつけることをやめたモランの存在を意識しつつ、「モラン」であることの誇りや喜びをより強く表現する方途をビーズ装飾の中に見出しているのである。

(なかむら・きょうこ／京都大学大学院  
アジア・アフリカ地域研究研究科)